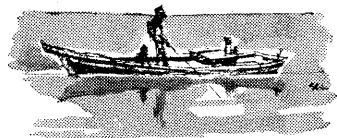


# マリア・モンテツソリの町

## グリフォオーネをたずねて

西 本 美 節



ヨーロッパにおける幼児教育の近況を調査研究するため、わたしたち一行が最終目的地であるイタリアのベルジアに着いたのは、一月二日夜の十時半をまわっていた。水の都ベネチア（ベニス）をあとにフィレンツェ（フロレンス）からトレントーラ、

ベルジアへと、汽車を乗り継いだ。午後四時にはほとんど日が暮れ、朝は九時ごろにならないれば夜が明けず、昼間はきわめて短く、陽光はほとんどおがめない。町並みはネオン一つなく、静かな澄みきった空気に包まれている。バスを待つ間、駅の構内にはいる。中央に、キリスト降誕のそぼくなパノラマが飾っており、一メートル四方の小規模なものであるが、それでもあたり一帯に、はなやかな色どりを添えている。照明としては、自然色の電球の光を当てているにすぎない。そぼくな暖かみというものであろうか。やがてバスで小高い丘の中腹にあるグリフォオーネ・ホテ

ルに着いた。この町でいちばんりっぱなホテルだが、日本にみられるような豪華な感じではなく、こぢんまりした、落ち着きと安らぎを感じさせるものであった。じゅうたんや屋内の装飾がベージュを中心とした中間色を多く取り入れているためだろう。

翌朝九時、一行はバスでモンテツソリ「子どもの家」（児童館）を訪問した。中世の建物を思わせる二階建ての土色をした家の前で、バスが止まる。れんが造りの家が眼下に見える丘の頂上近くである。門もなければ、学校や幼稚園らしいものは、なに一つ見えない。狭い窓わくのあざやかな緑色が、少々ちぐはぐな感じをいだかせる。

二階の窓下には、植木鉢が並び、かれんな無名の赤い花が咲き、シートや下着が干されている。その横手の下に、大きなドアが両開きになっている。ここからはいるのだと聞かされて、もう

一度見直したが、普通の家と全然区別がつかない。いぶかりながらドアを開くと、白地に青い縦じまのシャツを着た用務員らしき男が、にこやかに次のガラス戸を内側からあけて、待ち受けていた。晴れ晴れしい明るさは期待できないが、それにもまして清らかな美しさに心を打たれる。

幅二メートル余りの中廊下には、保育室が二つ並び、へやごとに、クリーム色・青色と色分けされている。天井は少し高いが、中間色の優美な壁画が一面に描かれ、思わずうっとり見とれた。廊下の突きあたりのドアをあけると、右手に祭壇とおぼしいたながあり、その下には、子どもたちがひざまずき祈りをささげるための長いクッションが、低い二段の階段の上に敷かれている。

次のへやはホールになっていて、床には赤・黄・青三色のラインが、だ円形に数本書かれている。おそらくすべての子どもがこのラインによって、生活のルールを学ぶ端緒を開いたことだろう。モンテッソリ教具の第一である。ここでわたしは、モンテッソリ教具の一つである音感ベルを手に取り、モンテッソリの教えを受け、現在この学校で子どもや学生の教育にあたっておられるパオリニ女史から、じかにその取扱法を学ぶことができた。

次のへやは、子どものロッカールームだろうか。白地に小柄な花模様のカーテンの中には、小ぎれいにせんたくしアイロンがけ

した仕事着が、ハンガーに掛け並べられている。それぞれが思いのこや柄で、どれも子どもを引き立てるような個性的なものだが、じみな小模様の花柄のものが多い。あいにく流感はやっていたため休みになり、子どもの活動や保育の実態が見学できなかったのが心残りであった。パオリニ女史もたいへん残念がっておられたようだ。

へやの片すみに、子ども用の五十センチメートル四方のブリキ張りの洗たく台があり、せっけんも見える。その向かいには、十センチくらいのアイロンを置く、三十センチ四方くらいのブリキ張りのアイロン台がある。その横手の戸だなの中には、きちんとたたんだハンカチや、まっ白なエプロンが整理してある。廊下には化粧台が用意してあり、時おり子どもたちがここで髪をとき、服装を整えるのだという。保育室のすみには、子ども用のほうきやちり取りなど、そうじ用具が掛けてある。洗たく台にしろアイロン台にしろ、すべて子どもの体格にうまく合わせて準備され、白木の美しさをそこなわぬように色どられている。

机の上は、へやによりピンク・青・クリーム色と色分けしてあるが、足の部分はベージュ系統の色で統一されている。しかも、いすや机は、ひとりひとりのからだに合わせてあり、ひとりで簡単に移動できるように軽い木材を使用している。机の置き方は、ひとりあり、ふたり向かい合わせあり、十人余りが皆同じ方向に

二列に並んでいたり、さまざまである。保育室全体の三分の一ほどをブロックで仕切り、観葉植物を植えてある。窓にはレースのカーテンが掛けてあり、植木鉢がひとつふたつ置かれている。レースのカーテンと植木鉢は、ヨーロッパバビュウどこへ行っても、よく見かける。

いちばん奥のビんクのへやの中二階は、観察室になっている。周囲の壁に沿って幅一メートルほどの回廊になっており、ここから階下の保育室のようすが見渡せるしくみである。回廊の内側には、高さ一メートルほどのコンクリートの腰壁があるため、一階の保育室から見上げても、二階の回廊から観察している人に気づかないようである。

一階の保育室には、まわりの壁に沿ってモンテッソリ教具を並べてあり、中央には個人用の机やイスが思い思いの向きで置かれている。児童画も所々に展示されているが、日本のように、画びょうでとめたりはせず、教師の手作りの厚紙製の額縁の中に入れて飾られている。また、その額縁は、中の絵とうまく調和する色のものが選ばれている。絵は、一般に日本の子どもものものより少し線が細いようだが、一面に夢のような淡い色を用いている。子どもたちの気に入った絵を、話し合いで選び飾ってみせるらしく、どの子の絵も差し替えによって必ず展示されるようになっていくが、日本の幼稚園の保育室のように、気に入っても入らな

くても、いっせいに満艦飾のようにはりつけるようなことはしない。ここにも、個々の子どもの人格を認めているようすがうかがえるように思う。

南側のテラスは一メートル半ほど出ており、コンクリートでゆったりとしている。木製のブランコと円形階段が置かれており、それも素材をうまく生かしている。園庭はほんの内庭程度の狭いものだが、れんがで仕切られた花壇は手入れが行き届いている。階下は幼稚園で、二階は小学校である。小学校にも個人別の机とイスがあり、机の片すみに思い思いのカードや紙人形がセロハンテープで張りつけてある。算数や地理・歴史などの教材が、子どもの年齢にふさわしく、理解しやすいように置かれている。

窓から中庭を見ると、隣や裏の家の物干しが目と鼻の間にある。しかし、その物干しの片すみに、小さな古いキリスト降誕の人形がごちんまりと飾られているのは、やはりクリスマス・シーズンならではの光景であろう。最高学年のへやになると、机とイスが全部黒板のほうに向いているが、おとな並みの大きさである。色は白木のままで、形はかまぼこ形をしていて、思わずずわってみたい気持ちに誘われる。壁には、世界各地のペンフレンドからきた便りが、世界地図の下にはられており、印象的であった。幼稚園と小学校の一貫教育は、このような小規模なものでなければ、とてもむりだと今さらのように感じた。

この建物は、もともと修道院だったものを、イタリアの教育関係者が一九五〇年にモンテッソリのために、教育の場と定めたものという。修道院の個室だった二階が、今は小学校に当てられている。したがって、バオーリーニ女史は、講演の中でも施設見学中でも、絶えずこのことを気にかけて、これははじめから子どものためを考えて建てられたものではないと強調しておられたのである。

ゼミナールにおいて、バオーリーニ女史は、モンテッソリが、人間形成は幼児期に端を発することから、この地で四十人の幼児とともに教育を始めたことや、現在、アメリカのハーバード、シカゴ、ワシントンなどの大学で提唱されている「幼児教育は生まれ落ちたときから始まる」ということを、既に五十年前から実践していることを力説された。女史の講演の要旨を述べると、次のとおりである。

マリア・モンテッソリ (Maria Montessori, 1870~1952) はイタリア最初の女医であり、その研究テーマは精神薄弱児の教育であった。彼女は、この教育方法を正常児に適用すれば、より良い教育ができるのではないかと考え、この仕事に着手した。イギリスなどで精神薄弱児の研究を十年間行ない、その後その方法を正常児にあてはめ、確信を得た。彼女のそのころの対象児は、生活水準の低い両親に育てられた子どもだったが、子どものほんとう

の姿は、育てる両親と関係がなく、子ども自身の中に偉大な力を見つけ出すことの重要性を悟った。教えこむのではなく、子どもの魂が自己を表現したもの、すなわち『子どもの発見』について、教育者はそれをじゃましたり、特に訓練したりせず、その自然の発達を助ける役割をもっている。

さらに、子ども自身の姿、すなわち自然法ともいべき姿の発達を関することにあり、これは国籍や民族に関係なく、生まれたての赤ん坊の持つ豊かな力が、既にそれである。生後二年間は、生涯にとって最大の影響を与え、強大な吸収力をもつ。この時期の子どもは、助力と尊敬を受ける存在でなければならぬし、これは両親の責任でもある。三歳になれば、多くの手助けを必要とする状態で『子どもの家』にはいる。ここで、この年齢の幼児の特色である『敏感期』についてじゅうぶん考える必要がある。

### 1 吸収する頭脳——

幼児は、言葉のみならず、すべての文化を吸収し、幼児なりに小さな文化の中で、完全に子どもとして生活している。この敏感な感覚ですべてを受け入れるのは、一時的な現象で、やがて消失する。しかし、このすばらしい感覚で受け止めた人格はその子の生涯を支配するだろう。この時期の幼児が、容易にすべてをわがものとして受け入れるのは、幼児がおとなよりも早く外国語をマスターするのと同じだといえる。

## 2 子どもの働き——

このような子どもに必要なことは、最も助力を必要とする時期に、力をかしてやることだ。落ち着いた環境を整えることが大事だ。子どもの働きは、それによって自分自身を構成すること、人格形成をすることだ。

この働く時期に行なわれる子どもの完成を助けるために、教師がなすべきことは、次の二点である。

イ 子どもの心身の発達を細かく観察すること。

ロ まわりのおとなの姿勢に気を配ること。

子どもを理解し、伸ばすことであり、謙虚な態度で、偉大な力限らない未来を持っている子どもの前に立つにふさわしいおとなであることだ。最適の方法を見出すための観察が必要であり、環境を整えることが重要だが、その環境は子どもの発達に即していなければならぬ。観察によりつかんだ個々の子どもの発達のリズムにしたがって、子どもの内部より現われる要求を、子どもとともに発展させていくことがたいせつだ。

## 3 習う子ども——

子どもは生来習うことを好むものだ。子どもの直感的要求は「知りたい」ということであり、食欲が人体を養うのと同じである。もしも事象に無関心な子どもがいるというならば、その子になにかの障害により、その要求がこわされているのだ。「知る」

ということにより、精神は養われる。子どもは精神的に飢えた状態にあり、おとなはその子に必要な滋養物を与えねばならない。そのためには、環境を整理することが必要だ。

## 4 環境の整備——

色は明るさを必要とし、子どもが自分で持ち運びしやすい材質を選ぶ。いすは個々の子どもの体格にあい、よごれがすぐわかるようにしておく。さらに、子どもが自宅にいるような気持ちでいられるよう配慮をしている。教具の使用法ばかりでなく、その後にあるものについても教える。すなわち、精神の平衡を保つことの重要性についてである。

モンテッソリの教育は、教育方法のための教育ではなく、その真の目的は、あくまでも子どもが持つ無限の力(可能性)・感性を養い、子ども自身の働きを重んじ、習うことを喜ぶ子ども心を満足させることで、この目的を達するための手段として教具を用いるのだ。したがって、目的と手段とを転倒しないようにしなければならぬ。「清らかな水があふれ出て、かわいた土を湿らせていくように……」これが教育の真髄である。

現在、ここで教育している子どもは、幼稚園だけで三二〇名・八組である。一組には、教師一名・補助教師一名・職員一名・実習生二名が配置され、毎日くわしく観察記録をとり、討議し、ひ

とりひとりの子どもがかたよらない、よい教育法を立案実践している。さらに、母親とは絶えず密接な連絡を保ち、特に家庭教育のパンフレットなどは準備しないが、母親との個人面接により、子どもの教育と協力について話し合っている。わが国のように、いっせいに集まる母親教室や、父母会・保護者会というようなものでなく、個人懇談により個別指導を行ない、家庭教育と幼稚園教育の一貫性をはかっている。子どもが好ましくない行動をするのは、おとなが子どもの要求をよく理解していない場合だと考え、母親との協力により成果を収めている。したがって入園当初にみられる生活のリズムの乱れや、しつと心や不安からくる好ましくない行動も、やがて消失し、持っている能力をじゅうぶん発揮することができる。

ゼミナールを終え、十三世紀に建てられたという市庁で開かれた市長の歓迎パーティーに招待され、医師であり教育者である市長が、わたしたちひとりひとりにねんごろな握手をされ、幼児教育を通じて世界平和のために手を携えることのないことを親しみと愛情をこめて示されたことは印象的であった。その場には、モンテッソリ協会の会長も同席され、ことしはモンテッソリ生誕百年祭が催される年に当たっており、この年の初めに日伊の幼児教育者の交歓が行なわれたことは意義深いと、心から喜ば

れた。さらに、イタリア語さえ習得すればだれでも、ここでモンテッソリ教育について研究する機会を得られるし、そのような篤学の士を歓迎することであった。

平静な町並み、整然とした石畳を見るにつけ、モンテッソリ教育の場にふさわしいこの町が、また、モンテッソリによってもっているという感じさえした。終わりに、わたしたちのために帰国を延ばし、通訳の労をとってくださいだった松本尚子女史のご厚意に對し深く感謝したい。

(大阪基督教短期大学)

## 変更のお知らせ

これまで毎年六月にお茶の水女子大学附属幼稚園で開いてきました「幼児教育実践指導研究会」は、当大学附属校園の話し合いの結果、当分休むことになりました。

従って秋には行なわないことになりました。

五月十日

お茶の水女子大学 文教育学部  
附属幼稚園内 幼児教育研究会